

印度での教育会議に出席して

小 林 澄 兄

私の今度の印度旅行の目的は、教育会議に出席するとともに、印度の教育事情を少しでも視察するためであった。

教育会議というのは、「新教育連盟」(New Education Fellowship—NEF)の本部(ロンドンにおける)ならびに印度支部の共催のもとに去る12月28日から1月6日までデリ大学で開かれた「第十回国際教育会議」である。その日本支部「国際新教育協会」を私が代表して出席した形になっているが、この協会には私の旅費を支弁する能力がないので、他からの援助を必要とした次第である。

この会議を運営するのに60名ほどの‘Trainer Lecturer’, ‘Group Leader’をおくこととし、これらの人たちは去る12月16日から集まっていかにこの会議を指導するかを研究していたのであった。

私は、会議第一日から出席したが、開会式はデリ大学の教育学部ともいふべき「中央教育インスティテュウト」の構内広場の花やかな天幕のなかで行なわれた。参加者600名のうち500名は印度の教育関係者で、残り100名が諸外国からであった。身近かな国では韓国から一名、台湾から二名であった。支部のある日本から私一人というのは少な過ぎたわけである。

Nehru 首相、会議接待委員長 Deshmukh 氏(元大蔵大臣)、デリ市長 Sharma 氏の祝辞、NEF 総裁 Saiyidain 氏(文部省顧問)、NEF 議長 Lauwerys 教授のあいさつなどがあった。これらの人びとのいうところは、いずれもこの会議の意義の深いことを高調した長口舌で、単なる式でないことを痛感させられた。

この日の午後から仕事が始まった。会議の主題は、『教師とその仕事—東と西』(The Teacher and His Work—East and West)となっていて、これが次のような六部門に分けてとり扱われた。

- (1) 教育に対する Gandhi の貢献
- (2) 教師教育の哲学と実際
- (3) 教育行政・視学・再教育
- (4) 責任を果す生活に対する家庭、学校教育

(5) 近代教育における諸科学の位置

(6) 近代教育に対する諸芸術の貢献

これらの6部門がさらにそれぞれ幾つかのグループに細分され、各グループ毎に研究・討議が進められた。

私は第二部門の1グループに籍をおくことにしたが、このグループにはニウ・ヨーク大学の **Redefer** 教授も所属していた。この教授は昨秋来日して私も近づきになって居り、日本の教育事情を相当によく承知しているのだから、自然日本はこうだ、ああだという話題でにぎわった。われわれのグループには、スコットランドから来た **Moulton** 女史(某女学長)、ボムベイ市の視学官 **Desai** 氏、台湾省立師範大学教授孫亢曾氏などのほか数名の印度教育家が参加した。

印度の教師の地位・待遇はよくない、両親や児童・生徒の教師に対する尊敬意識は薄い、教職というものが確立していないなどという正直な告白が聞かれ、教員養成の問題はどこの国でもまた新たな問題となりつつあることが明らかにされた。

教師が自身に対する評価をし、足りないところを補って行く努力を惜むべきではない。教師の自由は幅ひろくみとめられなくてはならぬけれども、イデオロギーをふりかざして児童・生徒をインドクリネエトすることの自由を許すべきではない、教師に対する他の教師の評価、校長や主事が部下の教師を評価することなども方法がよろしければ教育上必要だといわなくてはならぬ。——これらの意見がほとんど一致した結論のように述べられたのであった。

第一日の夕方には、デリ市長の歓迎会がクウィンス・ガアデンという広場でやはり豪華な天幕をはりめぐらされて行なわれ、又も市長のあいさつ、NEF 総裁の答辞などがあった。**Gandhi** と **Tagore** とは印度の精神の父、教育の祖として何度もその名がたたえられた。

12月29日。午前中は六部門の研究討議が続行され、午後は市内見物。

12月30日。午前中は前日と同様。午後2時30分から NEF の理事会。これには私は日本支部の代表者として出席。顔なじみが大勢居並んでいる。本部のラワリイズ教授、事務総長 **Annand** 氏、機関誌ニウ・イラの編集長 **Volkov** 女史、プリストル大学の **Ben Morris** 教授、教育評論家 **Hemming** 氏、ベルギー支部長 **Biscompte** 氏、シドニー支部長 **McLean** 氏などとともに **Harold Rugg** 老教授、**Redefer** 教授なども打ちそろっているのだから、心おきなく勝手なことがいえる。NEF の事業促進のために財政的基礎を固める方策についての審議。午後4時からデリ市の教育理

事者および中等学校長の合同歓迎会。午後5時30分から前記ラッグ老教授の講演。

『創造への教育』について述べられた。児童中心主義で甘んずべき時代ではない。そうかといって社会中心主義だけで押し通せばよいというのでもない。児童生徒を現在および将来の個人的・社会的の創造生活の主体たらしめる新教育がもっと積極的に要求され実施されるべきだという趣旨がきわめて熱心に説かれ、参会者の多数を感動させた。夫人とともに近く三度目の来日がきまってる、私はこの講演を日本でもやってもらいたいとつくづく思った。教授夫妻とは宿を同じくし、懇意になっているので、東京での案内は私の買うべき一と役となったわけである。

12月31日。午前中は前日と同様。午後2時から NEF の理事会。午後4時から Brains Trust —これはパネル・ディスカッションのような試み。午後5時から諸学校の生徒学生のわれわれに対する盛んなもてなしの会で、いろいろな余興を見せたり聞かせたりしてくれた。

1月1日。元日だというのに、午前中は前日と同様。午後2時からブレエンス・トラスト。午後4時から印度を主題としたフィルムが披露されたが、NEF の理事会とかち合ってしまった。

1月2日。午前中は例の研究討議。土曜日なので、午後から明日へかけて有志の一泊見学旅行が行なわれたが、私は都合で同行を見合わせ、市内でいま呼びものの「農業世界博覧会」などを見物した。この会ではアメリカとソ連と中共とがせり合うような大規模な展覧をしているのに、日本は少しも協力していないのが淋しかった。

1月4日。午前中は例のグループ・ミーティング。午後4時から大統領の歓迎茶会。官邸の内外の豪華さに眼を見張る。大統領はわれわれ遠来の客と一々握手、一時間ほどして国歌の演奏されるなかを、われわれをあとに残して辞し去った。それから NEF の理事会が文部省の一室で開かれた。

1月5日。午前中は前日と同様の研究討議。しかしわれわれ海外からのお客さんは、午前10時からネール首相に会うこととなった。9時デリ大学前に集合してバスをつらねて首相官邸へ行く。この道すがらおそらくは代表的のスラムの一区域を見せつけられた。およそ人間の住居とは思われないほどのひどい場所である。あたり一面一木一草もなく、くずれ落ちんばかりの土塀のなかにうずくまっている住民の姿は形容しようもない。とくに子どもたちがまっ黒になって何を遊んでいるのか無邪気そうに遊んでいる様子は見るにしのびない。こういうところを通りすぎてから

官邸へ行ってみると、あまりにも深刻なコントラストが感得される。大統領官邸の屋内・後庭の方がもっとりっぱかと思うが、首相官邸の後庭も実に美しい。芝生の一角で首相は何ともいえない温顔でわれわれと一々握手を交わした。芝生に円陣をつくって座席をとり、茶のもてなしを受けながら一時間にわたる首相との一問一答はすべて教育についてであった。印度を救う根ていはけっきょく教育だ、ある意味では政治よりも教育が優先すべきだ、こうして世界の各国から教育に理解のある人たちがきて会議を開いてくれたのは、印度にとってありがたいことであるなどと真面目な感想をもらしていた。お世辞ばかりをいっている風ではなかった。もっと話したいが閣議があるからとのことで、われわれも好感をもってかれと別れた。

会場に帰って、午後1時30分から NEF の理事会。前日印度政府の招きによりソ連の教育家が五名デリにきていた。ラワリイズ教授がおもに奔走したらしいが、このなかの一人を理事会に呼び入れることに成功した。その名を記しておいた紙片をなくしてしまったのは残念である。とにかく一人やってきて、このような会議をどう思うかとのラワリイズ教授の問に答えて、大によいことだ、いずれはソ連も仲間入りすることになりたいものだ、諸君がソ連に来てくれることは心から歓迎するなどといい、むしろ多くを語らずにわれわれの拍手に送られて辞去した。

午後2時からブレエンス・トラスト。4時から文部大臣 Shrimali 氏の講演。これが終ってさらに NEF の理事会があり、今日もいそがしく暮れて行った。

1月6日。いよいよきょうが最終日。午前中は、連日のグループ・ミーティングのしめくりをつけるための会議。午後4時から大統領の講演があつてついに会議の幕が閉じられたのであった。

私は、いつも同じグループにくぎづけされていることのバカバカしさを思って勝手に行動し、六部門のうちのどれかのグループに顔を出してみた。あるとき第一部門の Rarachandran 氏の室に入ってみたことがある。この人は印度の紡績業その他の手工業の協会の指導者の一人で、ガンディの研究者としても聞えている。ガンディに関するいろいろな本を書いている。二十数名のグループの前で何を説いているかと耳を傾けてみると、やはりガンディ精神で教育は貫かれなくてはならぬ、宗教教育が教育の中心であるべきだといっている。その宗教教育の何を意味するかは述べられなかったが、ヒンドウ的の宗教教育を意味するにちがいがなかった。宗教教育をもとにして、‘Craft education’ を重んじなくてはならぬともいっている、これは手技を主とする教育である、この教育は ‘toy-making’ からはじめられるべ

きである。子どもたちにいろいろな玩具を思い思いにつくらせる、もちろん指導しながらである、この活動を奨励することによって学習は進む、教育は自然と行なわれるというのであった。要するにわれわれが従来から唱えてきた「労作教育」(Arbeitserziehung) をガンディ精神で印度風にやっけて行こうというのであった。この意見に対して質問応答が割合に活発であったのは、興味のあることであった。

会議九日間にわたる内容の詳細をここに報告することはできない。NEFの国際会議は、

1921年 カレエで14ヵ国から150名

1923年 モントルウで300名(参加国の数不明)

1925年 ハイデルベルクで30ヵ国から450名

1927年 ロカルノで22ヵ国から1,200名

1929年 エルシノアで(参加国の数および参加者数不明)

1932年 ニイスで(同)

1953年 アスコフで(同)

1956年 ユトレヒトで(同)

以上のうち第四回(1927年)には日本人として私と土井竹治氏とが出席、第6回(1932年)には故羽仁もと子、羽仁恵子女史、大志万準治氏その他数氏が出席、第8回(1953年)には私ひとり出席、イギリスでの地方的会議には赤井米吉氏が出席したという前歴のもとに今度もまた私ひとり出席したわけであるが、NEFがよく30数年の歴史をつづけ、ユネスコと協力し、いなむしろユネスコの生みの親のような役割を果し、今度は今度でアジアにまで第10回会議を持ちこんで、国際理解・国際協力の教育のためにつくしてきた功績は高く評価されるべきことだと思う。

各国の教師のあり方について真剣に報告され研究・討議されたが教師が教職としての自覚と実力とをもち、一生の仕事としてこれを選び、同時に教師の地位・待遇の合理的向上が実現されなくてはならぬという点で、各国の人びとが意見を同じくし、各国の教師が協力して世界の平和・人類の幸福のために貢献しなくてはならぬことを今更らのように語り会いちかい合った今度の会議の意義は深いといわなくてはならぬ。

日本におけるように教師が教職に専念することから脱線して、イデオロギー的闘争にのみ明け暮れする一部の指導者によって戸惑いさせられている様子は、どこの国にもあるとは報告されなかった。なお印度のある地方では大学学生がイデオロギ

一的でなくて大学当事者に対して設備改善などを要求するさわぎを起こして、警察の検挙沙汰にまでおよんだことが私の滞印中一二度報道されたことを附記しておきたい。

× × × ×

書き忘れたが、晴れの開会式に当っては、女学生の一団によって次のような意味のうたが合唱された。

だれでも易々とすべての障碍を乗り越えよ。

だれでもが繁栄と幸運とを獲ちとろう。

だれでもがその心の願いを果し遂げよ。

だれでもが到るところで歓び深かれ。

閉会式に当っては、大統領とサイイデエン氏とラワリーズ教授とデリ大学長 Rao 氏とがこもごも立ってあいさつした。大統領は、少女の一団の合唱のあいだに姿を見せ次のようなことばをもって自分のあいさつの結語とした。

「著名な教育者 NEF の諸君、願わくは教育がただ個人の限られた目的を果すだけで終らぬようにしていただきたい。ただ競争と自得とで終始しないで、協力と奉仕とに教育が役立ち、もって新しい世界が建設されて行く礎石となるように……。」

(本学教授)